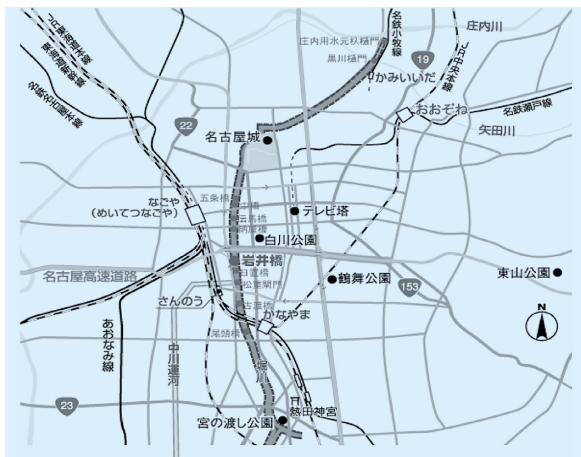
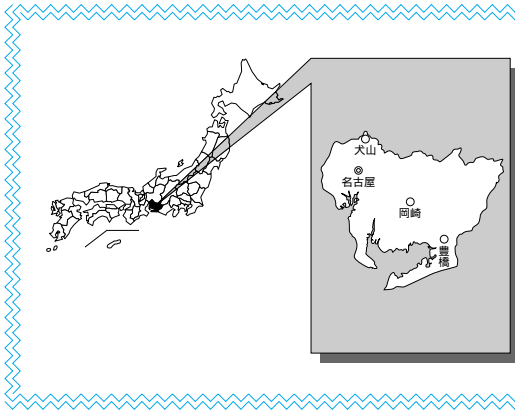


土木紀行

岩井橋

愛知県名古屋市



(1932)には堀川と中川運河がつながり、松重閘門により水位が違う両河川を行き来できるようになった。

堀川と岩井橋

堀川に架かる橋と言えば現在53橋あるが、堀川が開削された慶長15～16年に架けられた、上流から五条橋、中橋、伝馬橋、納屋橋、日置橋、古渡橋、尾頭橋の七つの橋が有名である。

その中で岩井橋は、大正8年(1919)に計画された、名古屋市第1期都市計画街路事業の第1号路線、岩井町線の一部として、大正12年、堀川に架けられた。

岩井橋は、わが国に現存する鋼製アーチ橋としては日本で2番目の古さを誇っている。また、橋の側面にはアンクル材を巧みに曲線加工した飾り板が施されている橋として有名で、2007年には土木学会選奨土木遺産に認定された。

設計は、日本で最初の橋梁仕様書「標準橋梁仕様書」をまとめた関場茂樹(1876～1942)が行ったと言われており、意匠設計は明治中期～昭和初期の日本を代表する建築家である武田五一によるものである。

四隅には、船の荷揚げ用に親水階段が設けられ、御影石の係留柱が今も残っており、デザイン的な全体の美しさ、バランスが良い橋である。

また、七橋をはじめとする堀川に架かる橋は何度か架け替えが行われてきた。

特に、明治期に架けられた橋の多くは交通量の増加と老朽化等から、次々と架け替えられていっ

名古屋の町と堀川の成り立ち

名古屋の歴史は、慶長15年(1610)徳川家康が名古屋城を建設したときに始まる。それまでこの地方の中心地は清洲(現 愛知県清須市)にあったが、いわゆる「清洲越し」によって町ぐるみで移転してきたのである。

名古屋の城下町は内陸部につくられたため、城下で必要な物資を大量に輸送できるのは船しかなく、海に面した熱田と名古屋城下を結ぶ運河が必要となった。そのため築城と同時期に、福島左衛門大夫正則によって、名古屋城西の幅下から熱田の宮宿を結ぶ堀川がつけられた。

19世紀になると堀川は憩いの場所として親しまれるようになる。両岸に数百本の桜、桃の木が植えられ、花見の名所として知られるようになり、人々は花見に繰り出し船遊びに興じたという。

近代になり堀川はまちの発展とともに延伸していく。明治10年(1877)に黒川開削、昭和7年

だが、岩井橋は大正12年当初より交通量が非常に多くなった今日においても架け替えられることなく昔の姿を残しており、橋梁としての設計が非常に優秀であったことが言える。

そのようなことから、堀川に架かる橋の中では岩井橋が大正期の橋としては、意匠面、構造面において最も価値のある橋と言える。

市民の憩いのスペースとして

かつて城下町名古屋の大動脈として栄えた堀川とそれに架かる橋。自動車輸送に主役の座を奪われ一時は忘れ去られた存在となっていく。昭和に入ってから、市街化の著しい進展とともに水は汚染し、護岸の老朽化も目立ち始める。そんな中、市民の間からも水質改善を求める声が高ま

り、堀川浄化プロジェクト「堀川1000人調査隊」という市民参加型の堀川浄化活動が積極的に取り組まれている。

このような市民による浄化活動が進み、以前の綺麗な堀川の水面に映える岩井橋が、市民の憩いのスペースとしてよみがえることを願う。

岩井橋諸元

- ・竣工：1923（大正12）年9月
- ・所在地：名古屋市中区（市道岩井町線）
- ・橋長：30.0m
- ・幅員：29.5m（車道21.9m＋歩道2×3.8m）
- ・径間数：1
- ・支間長：29.7m
- ・形式：ソリッドリブアーチ



写真 1 岩井橋（堀川上流より望む）



写真 3 飾り板



写真 2 親水階段

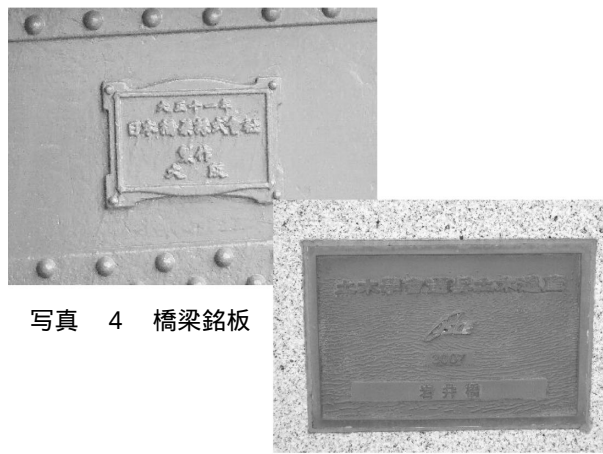


写真 4 橋梁銘板

写真 5 土木学会選奨土木遺産銘板